

目次

本書の目的と構成.....	v
---------------	---

第1部 学習者コーパスの構築と研究方法

日本語学習者はどのように聞いているか.....	小林 典子	3
—ディクテーション・コーパスから見えてくるもの—		
1. はじめに		3
2. ディクテーションについて		4
3. 収集方法と資料化		8
4. 学習者のディクテーションの考察		10
5. 今後へ向けたコーパス設計		18
6. おわりに		21
読んで理解する過程の解明.....	野田 尚史	23
—「読解コーパス」の開発—		
1. この論文の主張		23
2. 読解研究の必要性		24
3. 読解調査の方法		27
4. 「読解コーパス」の開発		29
5. 学習内容と実際の読解に必要な技術の違い		34
6. 語彙や漢字の知識による推測の成功例と失敗例		36
7. 学習者独自の文法による推測の成功例と失敗例		37
8. 既有知識による推測の成功例と失敗例		38
9. まとめ		40
未来の研究に向けたデータ収集.....	渋谷 勝己	43
—第二言語の習得・維持・摩滅の過程を解明するために—		
1. はじめに		43
2. 事例：パラオに残存する日本語変種の維持・摩滅のプロセス研究		45
3. 会話データでわかることとわからないこと		56
4. おわりに		61

第2部 学習者コーパスによる語彙研究

タスク遂行の鍵となる形態素.....	山内 博之	65
—KY コーパスへの話題タグと機能タグの付与—		
1. この論文の主張		65
2. 超級話者であることを特徴づける文法形態素		66
3. KY コーパスへの話題タグと機能タグの付与		70
4. 機能タグから見る「こう」「っている」の出現条件		73
5. 話題タグから見る「こう」「っている」の出現条件		76
6. 上級と超級の発話の質の違い		78
7. まとめ		84
学習者の語彙使用は習熟度を反映しているか.....	李 在鎬	87
—学習者コーパスの定量的分析—		
1. はじめに		87
2. 先行研究		88
3. データと方法		89
4. 結果		93
5. 考察		98
6. まとめ		102

第3部 学習者コーパスによる文法研究

気づきやすいコロケーション・気づきにくいコロケーション		
—母語話者と学習者の書き言葉コーパスの比較から—.....	中俣 尚己	107
1. はじめに		107
2. 先行研究		108
3. リサーチ・クエスチョン		111
4. 「たことがある／たことがない」のケーススタディ		111
5. 「てみる」のケーススタディ		118
6. 考察		123
7. おわりに		124

名詞述語文の習得に関わるねじれ文と「は」「が」の誤用について —学習者の縦断的な作文コーパスの分析から—	砂川有里子	127
1. はじめに		127
2. 分析データの詳細		129
3. 「名詞述語文」の分類と「誤用」の規定		130
4. 名詞述語文と誤用の出現頻度		132
5. ねじれ文		137
6. 「は」と「が」の誤用		141
7. 日本語教育への示唆		146

第4部 学習者コーパスによるバリエーション研究

話すタスクと書くタスクに見る日本語のバリエーション —日本語学習者コーパス I-JAS の分析に基づいて—	迫田久美子	151
1. はじめに		151
2. タスクと言語使用に関する第二言語習得研究		152
3. 分析調査の概要		154
4. 分析調査の結果		156
5. おわりに		166
年齢と環境要因による習得プロセスの違い —コーパスから探る習得順序—	橋本ゆかり	169
1. 研究の目的		169
2. 研究のアプローチ		170
3. L1 幼児の習得の段階性		171
4. L2 大人の習得の段階性		173
5. L2 幼児の習得の段階性		178
6. L1 幼児, L2 大人, L2 幼児の習得順序における共通性と差異		183
7. 習得プロセスに影響する要因と特徴のまとめ		187

あとがき —学習者コーパスと日本語実用言語学国際会議—	南 雅彦	191
--------------------------------	------	-----

執筆者紹介		194
-------	--	-----

本書の目的と構成

本書の目的は、日本語学習者の言語データを集めたコーパスをどのように拡充させていけばよいか、また、すでにできているコーパスをどのように活用して日本語教育研究を行えばよいかを示すことである。

日本語教育に実際に役立つ研究を行うためには、理論から出発するより学習者の言語データから出発するのがよいことが多い。しかし、個人で集められるデータには限りがある。そのため、データをコーパスとして公開し、共有することが重要になる。

同じデータをもとにしても、研究者によって注目することが違うことが多い。公開されたコーパスがあれば、1つのデータからさまざまな研究が行われる可能性も高くなる。

日本語学習者の言語データを集めたものとしては、古くは佐治圭三による『外国人の日本語作文に見られる誤用例集』（1980年）や、寺村秀夫による『外国人学習者の日本語誤用例集』（1990年）などが冊子体の科研費報告書として編まれたが、あまり活用されていなかった。その後、上村隆一による「インタビュー形式による日本語会話データベース」（1998年～）や、鎌田修と山内博之による「KYコーパス」（1999年～）が電子データとして提供されるようになり、2000年代からコーパスを活用した研究が少しずつ盛んになってきた。

現在は、日本だけでなく、海外でもさまざまなコーパスが作られ、インターネットでの公開も進んでいる。しかし、日本語学習者の日本語を分析し、日本語教育に役立つ研究を行うためには、さらにさまざまなタイプのコーパスを作っていく必要がある。また、コーパスを使った研究のテーマや研究方法をさらに多様化する必要がある。

本書では、これまでのものとは違うタイプのコーパスを構築することを提案するとともに、すでに構築されているコーパスを使いながら新しいタイプの研究を行った例を示す。今後のコーパス構築やコーパスを活用した研究に刺激を与えたいからである。

本書の構成は、次のようになっている。

第1部は「学習者コーパスの構築と研究方法」で、次の3つの論文が収められている。小林典子の論文では、学習者の聴解の実態がわかるコーパスの構築を提案し、そのようなデータを使った研究例を示している。野田尚史の論文では、学習者の読解の実態がわかるコーパスの構築を提案し、そのようなデータを使った研究例を示している。渋谷勝己の論文では、収集の目的が明確ではないデータを蓄積することの重要性を指摘し、そのようなデータを使った研究例を示している。

第2部は「学習者コーパスによる語彙研究」で、次の2つの論文が収められている。山内博之の論文では、学習者は「こう」と「っていう」のような文法形態素をどのように使っているかを、KYコーパスに話題タグと機能タグを付けた上で明らかにしている。李在鎬の論文では、学習者の日本語習熟度によって、使っている語彙の難易度や語種がどう違うかを分析している。

第3部は「学習者コーパスによる文法研究」で、次の2つの論文が収められている。中俣尚己の論文では、母語話者のコーパスと学習者のコーパスを比較し、母語話者にも学習者にも見られるコロケーションと母語話者には見られるが学習者には見られないコロケーションがあることを指摘している。砂川有里子の論文では、学習者の縦断的なコーパスを使って名詞述語文を分析し、ねじれ文と「は」「が」の誤用がどのような習得段階でどのように現れるかを明らかにしている。

第4部は「学習者コーパスによるバリエーション研究」で、次の2つの論文が収められている。迫田久美子の論文では、学習者に同じ課題を与えて話してもらったときと書いてもらったときで、受身や助詞のような文法形式の使用が違うかどうかを分析している。橋本ゆかりの論文では、第1言語として日本語を習得中の幼児と、第2言語として日本語を習得中の大人、さらに第2言語として日本語を習得中の幼児のデータを比較し、それぞれの文法形式の習得順序を明らかにしている。

本書をきっかけに、学習者コーパスを使った日本語教育研究がさらに充実していくことを願っている。
(野田尚史・迫田久美子)

第 **1** 部

学習者コーパスの
構築と研究方法

日本語学習者はどのように聞いているか

—ディクテーション・コーパスから見えてくるもの—

小林 典子

1. はじめに

人がどのように音声情報を受け取り、認知し、理解または誤解に至っているのか、聞いて理解するという受容の過程を知るのは難しい。この過程の解明のために、脳科学、認知心理学、情報工学など、様々な分野からの研究が進められているが、外国語教育の分野からも、外国語を学習者がどのように聞き取っているのか観察し分析することによって聴解過程の解明に寄与できると考える。

外国語としての日本語を学習者が聞いているとき、彼らの頭の中では何が起きているのか、頭の中を覗いてそれを知ることはできない。したがって、彼らの何らかの産出をとおして彼らの理解状況を分析するしかない。たとえば、日本語教師は聴解のクラスで、内容についての質問に口頭で答えさせる、要約文を書かせる、ディクテーションを課すなどによって理解の様子を確認する。この論文は、日本語学習者によるディクテーションを収集して整理した資料集をもとに聴解過程を考察すること、および学習者によるディクテーション・コーパスの構築を提案することを目的とする。**2.**では、ディクテーションとはどのような行為なのか、なぜディクテーションが聴解過程の考察に役立つのかを述べる。**3.**では筆者が試みた収集方法について述べる。**4.**では学習者のディクテーション資料集の中から興味深い例を紹介し、学習者がどのように聞いているかを考察する。**5.**では、日本語および日本語教育の研究に資

読んで理解する過程の解明

—「読解コーパス」の開発—

野田 尚史

1. この論文の主張

この論文では、日本語学習者が日本語を読んで、それをどう理解しているかを解明する研究が必要であることを主張する。

具体的には、次の(1)から(4)のようなことを述べる。

- (1) 日本語学習者の読解についての研究は、作文についての研究に比べ、あまり盛んではない。読解教育で具体的な読解技術を教えられるようにするためには、学習者の読解についての研究を進める必要がある。
- (2) 日本語学習者の読解過程を解明するためには、学習者に日本語を読んでもらい、理解した内容やわからないことを自分の母語で話してもらい調査が必要である。
- (3) 日本語学習者の読解過程を調査した結果を広く利用できるようにするためには、だれでも見られる「読解コーパス」を開発し公開することが必要である。
- (4) 日本語学習者の読解過程を調査すると、たとえば次の a. から d. のようなことがわかる。
 - a. 日本語教育の学習内容と学習者の実際の読解に必要な技術の違い
 - b. 語彙や漢字の知識によって語句の意味を推測する成功例と失敗例

未来の研究に向けたデータ収集

—第二言語の習得・維持・摩滅の過程を解明するために—

渋谷 勝己

1. はじめに

現在、ことばの研究のために使用されている会話・文章のコーパスやデータベースには、収集・構築の目的という点で、大きく分けて次の2種類があると思われる。

- (A) 汎用データ。ある種の基準をもって収集された、さまざまな目的に対応できるデータである。第二言語習得研究分野では、これまでKYコーパスなどがさまざまな言語事象の習得プロセスを横断的に明らかにするために使用されてきた。最近では、国立国語研究所のC-JASやI-JASも整備、公開されている。
- (B) 特定の明確な目的をもって集められたデータ。大阪大学社会言語学研究室が実施したStyle Shiftプロジェクトで収集したデータなどがこれに当たる。このプロジェクトは、中国語・韓国語・英語・タイ語の4つの言語をそれぞれ母語とする留学生の、ある特定の習得段階(中級)におけるスタイルシフトの実態を明らかにするというごくかぎられた目的をもって企画されたもので、それぞれの母語をもつ1人の日本語学習者が、親疎の異なる日本語母語話者および非母語話者計4名(話者によってはさらに日本人教師)と交わした会話を収録したものである(データ未公開。分析結果は大阪大学機

第 2 部

学 習 者 コ ー パ ス
に よ る 語 彙 研 究

タスク遂行の鍵となる形態素

—KY コーパスへの話題タグと機能タグの付与—

山内 博之

1. この論文の主張

日本語教育におけるそれまでの文法の扱いを白紙に戻し、コミュニケーションを目的とするためにはどのような文法が必要であるのかということ論じた野田尚史（編）（2005）以来、日本語教育文法に関する議論が盛んに行われるようになった。しかし、これまでのところ、日本語教育文法に関する議論は初級に焦点が当てられることが多く、上級、特にネイティブに近いようなレベルの学習者が使用する文法項目が研究の対象となることはほとんどなかった。そこで、この論文では、分析の対象を主に OPI の「超級」の話者とし、以下の3点を探る。

- （1）超級話者であることを最も顕著に特徴づける文法形態素は何か。
- （2）それらの形態素が出現する条件は何か。
- （3）それらの形態素は、「超級」レベルのタスクの遂行にどのように寄与しているか。

この論文では、分析データとして KY コーパスを使用するが、上記の（2）と（3）の分析を行うために、次の（4）を行う。

- （4）KY コーパスに話題タグと機能タグを付与する。

上記の（1）から（4）について、以下、**2.** から **6.** で順に述べていく。まず、**2.** では（1）について述べ、**3.** では（4）について述べ、**4.** 以降の分析に備える。**4.** と **5.** では（2）について述べ、**6.** では（3）につい

学習者の語彙使用は習熟度を反映しているか

—学習者コーパスの定量的分析—

李 在鎬

1. はじめに

この論文は、学習者コーパスを定量的に分析することで、語彙使用の傾向と日本語の習熟度の関連を明らかにすることを目的とする。学習者コーパスとして、会話(話し言葉コーパス)と作文(書き言葉コーパス)のデータを使用して、次の調査を行う。話し言葉のデータとして「KYコーパス」、書き言葉のデータとして「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」(以下、YNU書き言葉コーパス)の文字化データに含まれている語彙を2つの側面で調べる。1つ目は語彙の難易度、2つ目は語種である。1つ目の語彙の難易度とは、語彙の難しさに関するスケールであり、どのレベルの語彙を、どれだけ使っているかを調べるものである。2つ目の語種とは、単語の系統的分類であり、和語、漢語、外来語、混種語の使用率を調べるものである。

調査の結果として、次の点を明らかにする。1) KYコーパスでは、初級語彙と中級語彙が習熟度の判別に密接に関連していること、2) YNU書き言葉コーパスでは、初級語彙と中級語彙に加え、上級前半語彙が習熟度の判別に密接に関連していること、3) 習熟度によって和語の使用率に変化が見られたこと。

以上の調査結果から次の主張を行う。1) 話し言葉と書き言葉の差を習熟度の面から捉えた場合、書き言葉は話し言葉に比べ、複雑な分布を見せること、2) 産出データを見る限り、和語は易しく、漢語が難しい

第 3 部

学 習 者 コ ー パ ス
に よ る 文 法 研 究

気づきやすいコロケーション・ 気づきにくいコロケーション

—母語話者と学習者の書き言葉コーパスの比較から—

中俣 尚己

1. はじめに

この論文ではコーパスを用いた日本語教育研究の中でコロケーション、特に学習者のコロケーションに注目する重要性を主張し、またその中でも気づきやすいコロケーションと気づきにくいコロケーションがあることを述べる。

言語教育においてコロケーションの重要性は、教師・学習者ともに痛感していると思われる。Lewis (2000) は語の意味を知っただけではその語が使えるようにはならず、どのような語とともに使われるのかを知らなければならぬと述べている。

一般にコロケーションとは「嘘をつく」(名詞+動詞)や「可能性が高い」(名詞+形容詞)のように実質語と実質語の関係を指すことが多いが、中俣尚己(2011)がアスペクト形式の「である」が圧倒的に「書く」に偏っていることを示した通り、機能語と実質語のコロケーションも非常に重要であると考えられる。そういった研究を推し進める目的もあり、筆者は『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』(中俣尚己(2014))を著した。これは、大規模な母語話者の書き言葉コーパスである「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(以下 BCCWJ)を用いて機能語と実質語のコロケーションをまとめたものである。しかし、このハンドブックは母語話者のデータをまとめただけであり、学習者コーパスとの比較は行っていない。コロケーションに関する習得上の

名詞述語文の習得に関わるねじれ文と 「は」「が」の誤用について

—学習者の縦断的な作文コーパスの分析から—

砂川有里子

1. はじめに

「ねじれ文」は国語の作文教育でしばしば問題とされる誤用のひとつである。矢澤真人(2013)では、平成21年度全国学力・学習状況調査中学校国語Aの問題において、「この(=モナリザの)絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合います。」という文を修正させる問の正答率が50.8%ときわめて低かったことが報告され、この種の誤用は社会人の文章でも産出されると述べられている。上記国語Aの問は、「この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合うことです。」という名詞述語文への修正を求めるものであるが、「この絵の特徴」のような抽象的な名詞を主語に取る名詞述語文の場合、主語と述語が呼応しないねじれ文を生じさせる可能性が高い。小学生から大学生までの作文を調査した内田安伊子・瓜生佳代(1996)や、中学1年生の作文を調査した松崎史周(2015)でも、この種のねじれ文の出現が文法的な不具合のなかで最も多いことが報告されている。

このように、国語教育では、本来名詞述語文となるべき文の「ねじれ」が作文指導上の大きな問題となっている。しかし、このことは国語教育に限った問題ではない。日本語学習者の作文においてもねじれ文は数多く観察されるし、習得が進み、上級レベルに至ってもねじれ文がなくなる点についても国語教育の場合と同様で、この問題の解消は、日本語教育の作文指導においても重要な課題として取りあげる必要がある。

第 4 部

学習者コーパスによる
バリエーション研究

話すタスクと書くタスクに見る 日本語のバリエーション

—日本語学習者コーパス I-JAS の分析に基づいて—

追田久美子

1. はじめに

この論文は、現在、構築が進められている多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International corpus of Japanese as a second language, 以下 I-JAS) のデータを用いて、話すタスクと書くタスクにおける学習者の言語使用の変化について検討する。

具体的には、「学習者が同じ材料を使って話すタスクと書くタスクを行った場合、言語形式の複雑さや正確さに違いが見られるのか」「母語の異なる学習者のデータには、複雑さや正確さにおいて母語の影響が見られるのか」の2つの問題を検討する。

分析対象は、I-JASに含まれる12の異なる言語を母語とする180名の日本語学習者のストーリーテリングとストーリーライティングのタスクのデータである。前者は、5コマの絵を見て作ったストーリーを話すタスクであり、後者は、同じ絵を用いて、ストーリーを書くタスクである。これらのタスクで得られたデータの「受身」「～てしまう」「有対自他動詞」「助詞」の4つの文法項目の言語使用を分析した。特に、5コマの絵の特定場面の描写で、学習者が「受身」や「～てしまう」を使用するかどうか、話すタスクと書くタスクで「有対自他動詞」や「助詞」の誤用に変化があるかどうか焦点を当てて、分析を行った。

この論文では、データの分析から明らかになった(1)～(3)について述べる。

年齢と環境要因による習得プロセスの違い

—コーパスから探る習得順序—

橋本ゆかり

1. 研究の目的

第2言語習得（以下、L2）研究は、元来教授法の追究を目的としていたためL2途上の大人の学習者（以下、L2大人）を対象とする研究が多いのだが、第1言語習得（以下、L1）研究で提示された普遍的な習得順序がL2においても同様に見られることが報告されている（Krashen（1987）など）。またL1とL2プロセスに現れる誤用が似ていることも指摘されている。このことから言語習得は一定の順序に沿って進んでいくものと言える。

しかしながら、L1途上の幼児（以下、L1幼児）とL2大人の間には2つの大きな違いがある。1つは、L1かL2なのかの違い、そしてもう1つは年齢の違いである。この違いは習得順序に影響しないのだろうか。普遍的な習得順序の存在は多種類の形態素に関する調査に基づくが、1つの文法カテゴリーに焦点を当てた場合はどうであろうか。文法カテゴリーには複数のルールが相互に関連しながら存在する。そのため、1つのカテゴリーに焦点を当てて経時的に調べると、関連する知識がどのような関係性をもちながら体系を構築していくのかを探ることができる。そしてL2大人とL1幼児だけではなく、L2途上の幼児（以下、L2幼児）も含めることで、言語習得がどのように進むのかをより精密に追究できるのではないかと考える。近年、日本においてもグローバル化に伴いL2幼児が増加しているが、L2幼児がどのように習得を進めるのかにつ

あとがき

—学習者コーパスと日本語実用言語学国際会議—

1. コーパスへの関心の高まりと本書

言語発達研究などの言語調査では、データ収集ばかりでなく文字化に膨大な時間を費やすことになる。結果として、かつては少人数のデータもしくは事例研究（ケーススタディ）しか選択肢がなかった。言語データ共有システムとして体系化されたコーパスは、このような限界を解決してくれる可能性を秘めている。近年、日本語研究・日本語教育の分野でもコーパスへの関心が高まってきていることは誠に喜ばしい。

『学習者コーパスと日本語教育研究』は2014年3月22日、23日の両日、国立国語研究所（以下、国語研）で開催された『第8回日本語実用言語学国際会議』（8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese：略称 ICPLJ）でのパネルセッション「コーパスと日本語教育」を中心に編纂したものである。とりわけ、第1部「学習者コーパスの構築と研究方法」の3論文（小林論文、野田論文、渋谷論文）と第4部「学習者コーパスによるバリエーション研究」の迫田論文は、パネルセッション発表をより発展、深化させた論文だと捉えられる。同じく第4部に収められている橋本論文は第8回 ICPLJ での一般口頭発表「言語習得理論を研究の視点としたコーパス分析—第一，第二言語習得の幼児・成人の三者間の比較—」の進化形だと解釈できよう。

上記の論文ばかりでなく、読者の方々には、本書に収められている複数の論文、第2部「学習者コーパスによる語彙研究」で論じられている話し言葉コーパス（KY コーパス：山内論文）、ならびに、書き言葉コーパス（李論文）、第3部「学習者コーパスによる文法研究」にある書き言葉コーパスを使用した分析（中俣論文、砂川論文）を併せ読んでいただくと、そこに構築されている科学としての言語の側面、すなわち、自然言語処理技術や統計的データ解析の技術を駆使した言語科学としての言語学の世界にいつそう興味をもっていただけるものと信じる。

2. 日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ) が目指すもの

元来、ICPLJは、故三島登志子サンフランシスコ州立大学教授に捧げる記念学会として1998年5月に発足した。サンフランシスコ州立大学日本語科では、故三島先生をはじめとする教授陣の指導の下、日本語教師を目指す大学院生の教育を行なってきた。そうした中で、ICPLJは、日々、教育現場の最前線に立っていらっしゃる日本語教師の方々と、日本語言語学の最先端で活発な研究活動をしておられる研究者の方々に有意義な交流の機会を提供し、この2つの分野の間の「かけ橋」となることを目的として設立された。

こうしたICPLJの精神は今日に至るまで脈々と引き継がれている。ICPLJでは、ある特定の理論の構築を目指す研究ばかりでなく、基本的な理論を踏まえて言語現象の詳細を記述し、そこから日本語教育に実践的に敷衍させる姿勢を維持してきた。たとえば、言語処理や言語習得においては文脈依存的処理が必要だが、処理過程における働きなどの研究も含まれている。補足になるが、第1回から第6回ICPLJでの優れた研究発表論文は『言語学と日本語教育』シリーズ第1巻から第6巻(くろしお出版)にそれぞれ収録されているので、言語学・日本語教育・自然言語処理などに興味をお持ちの読者には、ぜひご覧いただきたい。

第8回ICPLJは、ついに太平洋を渡って国語研で開催された。この記念すべき国際会議を開催する貴重な機会をいただいたことに深く感謝の意を表したい。とりわけ、ICPLJを日本で開催することを強く推し進めてくださった国語研前所長の影山太郎先生には、この場を借りて感謝を申し上げたい。故寺村秀夫先生の信念として「日本語の研究というのは日本語教育に役立たなければ意味がない」ということを、影山先生は述べておられるが、ICPLJもそうした理念に立脚していることを再度、ここで強調しておきたい。

第8回ICPLJ開催当時、国語研がドイツの出版社De Gruyter Moutonとの共同プロジェクトであるHandbook of Japanese Linguisticsシリーズを推し進めており、私がおの一冊である*Handbook of Japanese Applied Linguistics*の編集者として、国語研の客員教授を務めていたこともあ

り、学会運営に直接関わることができたのは幸いだった。ちなみに、第9回 ICPLJ は2016年6月にサンフランシスコ州立大学で、そして、節目となる第10回 ICPLJ は影山前所長、野田尚史先生のご尽力で、再び国語研で2017年7月に開催することができた。今後も ICPLJ が太平洋を行き来することを切に願っている。さらには、ICPLJ が日本語ならびに日本語教育、さらにはそれらの研究への関心を惹起し、本書に見られるように多くの実りのある研究成果が出てくる契機となるようであれば、1998年の発足より ICPLJ に携わってきた者にとっては望外の喜びである。

3. 最後に

本書『学習者コーパスと日本語教育研究』が完成したのは、ひとえに野田尚史先生ならびに迫田久美子先生のご準備・ご努力の賜物である。読者の方々には、テキスト分析を含めた幅広い射程の研究から日本語そして日本語言語学に対する新しい洞察ばかりでなく、日本語教育への応用、すなわち、実践的な日本語指導を向上させていくための貴重な示唆を得ていただくことができると信じてやまない。

(サンフランシスコ州立大学 南 雅彦)